



# 忠臣蔵だより

平成 24 年 6 月発行 No 3 NPO 法人 忠臣蔵を守る会

## 目次

・「忠臣蔵図書館」再開のメド	中島康夫	一
・松平隠岐守中屋敷跡見学	萩原 栄	二
・志の高さ	渡辺 寛	四
・「大石内蔵助ら切腹の地」特別公開に参加して	田中慎一	五
・元禄快拳の遺薫にふれる旅	上森 茂	七
・潮田又之丞の「討入り引揚道筋図」	中島康夫	一〇
・第八回二級試験問題	・	一三
・自由広告	・	一六

## 「忠臣蔵図書館」再開のメド

代表 中島康夫

平成二十三年八月、仙石伯耆守の御子孫大内満利子様のご努力により、中央義士会の初期の帳簿や史料が、ほぼ全部が返ってきた。なかでも、中央義士会の会報「義士精神」が製本された形で、全巻返ってきた事は何よりもうれしい事であり、これこそが、義士研究者の全ての方々に、陽を当てる事は間違いない。製本された「義士精神」は、一冊が五センチ程の厚さになっており、それが、二十五冊、約三百四十四冊残されていた。

この製本された冊子は、要は、義士会発足の一号から百三十八号まで揃っているのである。現在まで、私個人バラで五十冊程度しか保有しておらず、三十年間神田古書街を闊歩して目にするとはなかった冊子である。

その他、中央義士会分会「新民会」の会報「新民」も故鳥羽正雄博士の未亡人鳥羽佐多様より全巻寄贈された百五十冊を含め、義士研究の専門書も全巻三セットから五セット程も揃っていることもあり、改めて、最後の奉公として「忠臣蔵図書館」の再開を目指しているところである。

保有している冊子は全部運び込まれたものの整理が追いつかず、あくせくの毎日でもある。

こうしているなかにも、この度、神田古書組合の文泉堂社長小西重兵衛氏と専属の取引を願ひ、赤穂義士研究の専門書並びに稀書は探し出されてきており、専門書は益々増えるばかりである。会員であれば、貸し出しも検討しているところである。

## 世の忠臣蔵ファンの皆様へ

## 寄附のお願い

元禄赤穂事件の真実を研究して、後世に伝えるためNPO法人の維持にご協力下さい。当法人の活動に賛同される皆様にご寄付をお願いしております。

寄附の方法／次の郵便振替口座にお振り込み下さい。振込手数料はご負担下さい。

(特非) 忠臣蔵を守る会 00190-0-346038

### 特典

ご寄付いただいた方の「忠臣蔵顧問」をさせていただきます。忠臣蔵に関するご質問など、何でもお答えいたします。また、当会作成の、小冊子をお送りいたします。

詳しくは、下記事務局へ

〒135-0047 東京都江東区富岡1-17-1-403 TEL/FAX 03-3630-1927  
メール office@chuushingura.jp URL http://www.chuushingura.jp/

## 松平隠岐守中屋敷跡 (現イタリア大使館)見学

代表代行 荻原 栄

平成二十三年十二月十五日(木)、大石主税や堀部安兵衛らが切腹した松平隠岐守中屋敷跡(現イタリア大使館)を見学できることになりました。これまで、見学の申請を出したことはありませんでしたが、許可が出なかった場所です。

今回の見学については十二月十一日、両国元禄市において、中央義士会中島理事長よりイタリア大使館に入れる旨のお話があり、見学の労を取っていただいた吉田泰仁氏の他、元禄市に協力参加していた、平日に見学が可能な、中島、富岡、若林、三輪、丸山と筆者(荻原)の計七名が参加しました。

十五日朝九時三〇分に港区三田のイタリア大使館前に集合、通用門を入ってから、空港の搭乗口のような厳重なセキュリティを通り、館内の部屋で案内をしていただくペッシ・ロベルトさんのご挨拶と説明がありました。イタリア大使館がこの地に移ったのは、昭和七年(一九三二年)、その前の明治、大正、昭和の始めまでは松方侯爵邸だったとのこと。さらに遡ると、江戸時代は松平隠岐守中屋敷でした。討入りの後主税や安兵衛を預かった元禄時代の当主は、松平(久松)隠岐守定直です。

一通りの説明の後、部屋から外に出ると、公邸建物の前には広大な芝生の庭が広がっています。その

庭に囲まれるようにして池があり、池の対岸のこんもりとした築山と紅葉した木々や庭石の配置がすばらしく、まさに都内に残された数少ない大名庭園の一つで、名園と言うに相応しい景色です。

元禄十五年十二月十五日に大石主税以下九名が、討入り後松平隠岐守にお預けとなり、元禄十六年二月四日にこの地で切腹しました。切腹した場所は当時の大書院の庭で、現在は池になっていて、切腹地を永遠に残すため池にしたとの言い伝えがあります。ペッシさんの説明では、現在の池は後に元あった池を大きくしたもので、元の池は現在の池の東側にあたることでした。従って、切腹した位置は現在の池の東側近辺であったこととなります。築山はこの池を掘った際の土を盛り上げて造られたとのことでした。

参加者一同は庭から池を廻り、築山に向かいました。途中、池に架かる朱色の太鼓橋を渡り、とても都心とは思えないような、木々の生い茂る山道を登って、平らな頂上に到着。そこによく知られている元禄事件の記念碑が建っていました。記念碑は池に向いて大きな台となる石の上に立ち(北面)、おおよそ縦二・五メートル、幅一メートル、厚さ十七センチメートルほどの大きさで、石造りです。昭和十四年(一九三九年)に当時のイタリア大使によって建立され、表面に日本語とイタリア語の両方で、碑文が刻まれています。

文は徳富蘇峰のもので、十五字×十二行に渡り義士十名の名と、この地で切腹したこと、忠烈の名を顕彰し永遠に伝えるためにこの碑が作られたことが書かれています。また、碑が建立された年代も刻印されていますが昭和十四年十月の年月と

共に、イタリアのその当時の元号である、ファシヨ年も並んでいます。しかし、ファシヨ年は戦後に削除されたようで、丸く削られていました。ただし、昭和十四年はファシヨ年十一年にあたるということが知られています。

記念碑を見た後、築山を下り、庭に戻って解散となりました。時間は一時間あまりでしたが、普通は立ち入れない場所であり、大変貴重な見学となりました。

最後に見学及び写真撮影を許可していただいたイタリア大使館と案内を下さったペッシ・ロベルトさん、見学の機会を作っていただいた吉田さん、そしてイタリア大使館との橋渡しをしていただいた衆議院議員の逢坂誠二さんに御礼を申し上げます。



忠臣蔵記念碑前にて



忠臣蔵記念碑



庭の池



庭の池—東側



庭の池—西側

赤穂ノ遺臣元禄十五年極月十四日  
 復仇ノ後大石主税良金堀部安兵衛  
 武庸中村勘介(ママ)正辰菅谷半之丞政利  
 木村岡右衛門貞行千馬三郎兵衛光  
 忠岡野金右衛門包秀員賀弥左衛門  
 友信大高源五忠雄不破数右衛門正  
 税(ママ)等十士八松平隠岐守邸ニ預ケラ  
 レシガ翌年二月四日切腹仰付ケラ  
 レ其庭前ニ自裁ス邸ハ先ノ松方邸  
 ニシテ現伊太利亜大使館敷地ニ当  
 ル因テ茲ニ其忠烈ヲ顕彰センガ為  
 刻シテ依テ永遠ニ傳フ  
 ファシヨ十〇年(〇は削り取られ不明)  
 昭和十四年十月 伊太利亜大使アウリテイ

蘇峯 徳富正敬誌

記念碑 碑文



忠臣蔵記念碑—碑文

# 志の高さ

（財）中央義士会 顧問 渡辺 寛

四月十五日、曾祖父 渡辺蒿蔵 旧宅記念式典に参列。至福の一刻を過ごしました。

江戸時代の長屋門から、明治中期の主屋、土蔵、茶室、数寄屋風表と奥の庭園。

野村市長の御挨拶に続いてテープカット裏千家淡交会の皆様による茶会。

まちじゅう博物館 萩ならではの優雅な一服、感無量。

有意義な楽しい一日となりました。

渡辺蒿蔵は松蔭門下生として九十七歳長寿を全うし、四十九歳で隠居したあと、松蔭先生の志を後世に伝えるために、余生を送りました。

松蔭神社参拝の契（昭和五十三年発行）江戸護送途中、泉岳寺前を通られる時、赤穂義士の墓前に手向けの歌

「かくすればかくなるものと知りながら  
己むに やまれぬ 大和魂」

とありました。

松蔭先生の忠臣蔵への思いは、松門四天王の一人、入江九一に伝わり

「赤穂浪人こそは、真の忠義を実行した人達である」

との言葉を思い出し、万延元年（一八六〇年）十一月十九日、高輪泉岳寺に詣で手を合わせている。

九一は誠に才智あり、忠義の志厚く、感心のものに候。弟野村靖と松蔭の志を最後まで実行しようとした二人。

（月刊松下村塾五巻）

志と気力が充実していれば、目標がどんなに遠くであっても、またどんなに困難であっても、できないことはない。

きれいに整備された旧宅の二階から見ると、影山土手の花壇から桜の花びらが舞う主屋、庭園。幕末から維新への歴史をたどる時

吉田松蔭が忠臣蔵精神に感銘を受け、大石内蔵助と同じ様に忠義を第一に生きたと感じます。

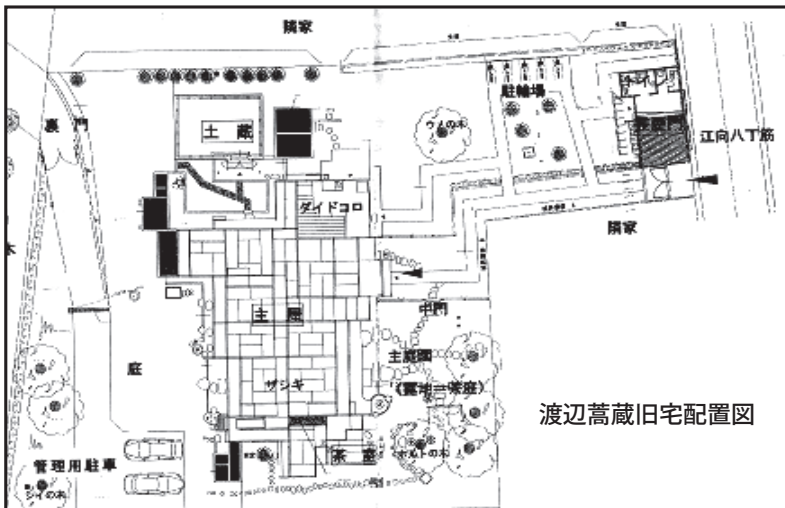
曾祖父渡辺蒿蔵（天野清三郎）が、松蔭先生留魂碑除幕式壇へ

「先師ほど世に忙しき人はなし  
死後は護国の神となるまで」

祖父渡辺世祐が蒿蔵翁追憶座談会（昭和十五年）



平成24年4月15日 萩市 渡辺蒿蔵旧宅にて



渡辺蒿蔵旧宅配置図

先考追慕

「百とせをかけて望みて甲斐もなく」

散りにし後ぞ思ひ出でらる」

これからの時代歴史に学び、志を高く持ち生きていきたいと思っております。

故渡辺蒿蔵氏は元中央義士会会長渡辺世祐博士の御尊父に当たられます。渡辺蒿蔵旧宅は、山口県萩市大字江向五番地にあります。JR萩駅から約一キロメートル。

平成二十四年四月一日に無料公開されています。常時公開ですが開館時間は、九時～十七時です。

（編集部）

## 「大石内蔵助ら切腹の地」

## 特別公開に参加して

テレビレタラー 田中 慎一

「どちらを向いて切腹したかなんて、そんなに大事なことだろうか？」

きっと数年前の私だったら、そんな風に感じたのではないでしょう。それが今ではことさら重要なことと思えてくるのですから不思議なものです。

平成二十四年二月四日(日)、義士達の命日にあたるこの日、中央義士会の主催で旧熊本藩細川家下屋敷跡(東京都港区高輪)が特別公開されました。ここは吉良邸討入り後、大石内蔵助良雄ら十七人が預けられた屋敷の一角で、まさにこの場所で“大石内蔵助らが切腹したという場所です。普段は閉門されていて滅多に入ることできません。この企画を知った私は、一も二もなく手伝いを兼ねての参加を決めました。所用のため最後まで立ち会うことはできませんでしたが、参加して気付いたことや感じたことを、ここに記させて頂きます。

江戸時代、細川家五十四万石の下屋敷があった場所は現在、高輪皇族邸、高松中学校、都営高輪一丁目アパート、港区立高輪図書館、そして民家になっ

ています。切腹の地は、高輪中学校と都営高輪アパートの間にあり、史蹟として保存されているのは、堀に囲まれた三十坪ほどの区画。義士達が眠る泉岳寺からも、約三〇〇メートルの距離にあります。特別公開が行われたのは、正午から一六時まで。その間中島理事長が、三〇分に一回のペースで合計七回、現地解説を行いました。その説明に熱心に耳を傾け食い入るように資料を見つめる見学者の姿がとても印象的でした。また時に毒舌を交えながら面白く解説していく理事長の話術にも、あらためて恐れ入った次第です。見学者の総数は、冬の寒い日にもかかわらず二六〇人に上りました。

切腹の地に初めて足を踏み入れた私の感想は、「意外に狭いな」というものでした。切腹時に義士が着座したとされる場所には、目印の庭石が置かれています。理事長によれば、当時の地平は三〇センチ程地下であつたろうとのことですが、目印の庭石の脇に立つと、なんともいえない感慨がこみ上げてきます。

内蔵助は最後に、ここで何を考えたのだろう…。愛妻家の小野寺十内は、やはり妻のことを思っていたのだろうか…。

幼い子供を残してきた潮田又之丞は…。などと、今さらながら義士達の心中に思いを巡らしてしまいました。

思うに、三百年前に切腹が行われたこの場所が今もこうして残っているというのは奇跡のことではないでしょうか。元禄十六年二月四日、内蔵助らが

切腹した直後、当時の藩主細川綱利が「十七人の勇士どもは、我家の守り神である。切腹の場所は浄めることはない。そのまま長く保存するように」と命じなければ、「なんとなくこの辺り」というレベルで今に伝わっていたかも知れません。また明治になり土地が皇室所有となった際には、明治天皇が「旧形を永く保存せよ」と命じたこの一言で、「切腹の地」はそれまでと同様に保たれることになったといえます。三百年前の切腹の地が「なんとなくこの辺り」ではなく、「まさにこの場所」として残っていることに、改めて歴史のロマンを感じずにはられません。

話は変わりますが、この日私が門の脇に立つて見学者に資料をお配りしている時のこと。高輪アパートに住んでいるという男性が寄って来て、「もう何十年ここに住んでいるけど、門が開いたのを始めて見た」と驚いていらつしやいました。その方にとつては、開かずの扉といった印象だったようです。また、たまたま通りかかったと思いき外国人にも話しかけられました。やり手の証券マンらしき男性(私の勝手な想像ですが)で、ジョギングをしていたようです。人が集まっているのを見つけてジョギングを中断、私に話しかけてきたのです。私が「英語は話せない」オーラを発していたからでしょうかカタコトの日本語で「チュウシングラ、デスカ?」と尋ねてきたのです。私を含めた数人が赤穂義士のハッピを着ているので察しがついたのだと思います。それにしても外国人の口からいきなり「チュウシングラ」という単語がでてきたことに、とても驚きました。その後、私が簡単な説明(もちろん日本語で)をしてあげると彼は目を輝かせ、アイフォンで写真を撮って帰っていきました。彼が赤穂事件と

忠臣蔵の違いを理解しているとは思えませんが、外国人の目の色を変えさせるほどの事件（ドラママ？）であることに間違いないと再認識した次第です。

また今回の特別公開に先立って、切腹の地にまつわる新事実が判明しました。それは大石内蔵助らが切腹した時の方角について。新資料「細川家白金屋敷図面」が見つかったことにより、それまで西向きで切腹したと思われていたものが、正反対、東を向いて切腹した可能性が強くなったのです。冒頭でも触れましたが、以前の私でしたら「どちらでも…」と思っていましたが、でも実際こうして切腹の地に立つてみると「義士達が最後の瞬間どちらを向いていたか」は、とても重要なことと思われました。

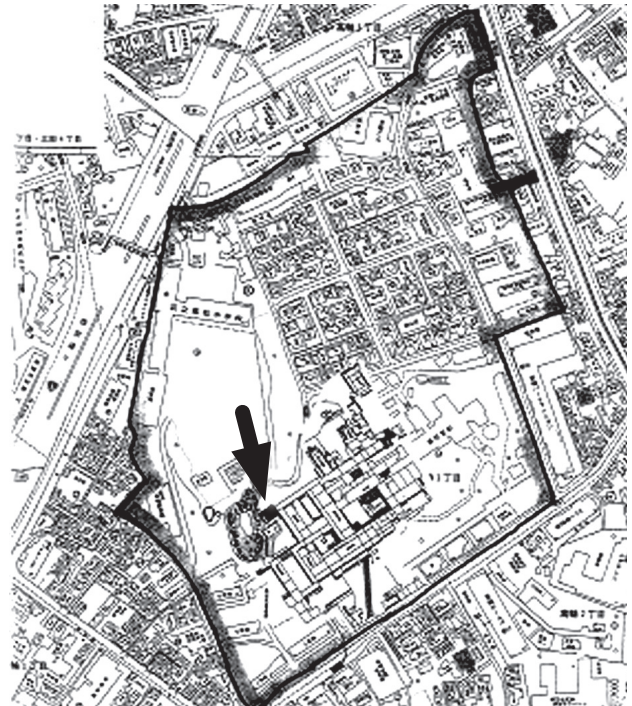
今回改めて感じたことのひとつに、大石内蔵助の存在の大きさがあります。私が好きなお小野寺十内もここで切腹しているのですが、現場に足を踏み入れると「大石内蔵助が果てた場所にいる…」との意識が頭から離れません。享年四十五だった内蔵助と、今の私がほぼ同年齢ということもあるかもしれませんが、それにしては三百年の年月を経て今なお存在感を發揮する内蔵助について、今一度学んでみたいとの思いが強くなりました。

最後に、昭和三十三年から二年という時間をかけたこの土地を史蹟として整備された当時の中央義士会の方々、そして今回の特別公開を企画された中島理事長をはじめとする現中央義士会の皆様のご尽力に心から敬意を表し、記事の結びとさせていただきます。

参考文献…「大石内蔵助ら切腹の地」中央義士会出版



説明の様子  
こちらを向いた右側が説明者の中島理事長



現代の地図に旧細川邸の絵を重ねた図  
真中左少し下の■が切腹場所



大勢に囲まれての説明の様子  
左端でカメラを構えているのは取材の赤穂タイムズ記者



切腹場所  
真中の平らな石が切腹位置

## 元禄快拳の遺薫にふれる旅

中央義士会評議員 上森 茂

平成二十三年十一月十八日(金)から十九日(土)にかけて、中央義士会の富岡さん、萩原さん、柿崎さん、丸山さん、上原さん、金子さん、上森の七人で、兵庫県加東市で開催された第二十三回忠臣蔵サミットに合せて、義士・浪士ゆかりの地二十余ヶ所を巡る旅に行ってきました。

今回は、兵庫県に詳しい柿崎、丸山両氏がナビゲータとなり、世間から忘れられつつある北播磨地方に眠る史跡を訪ねるのを主な目的にしました。初日は新大阪駅で合流し、十一時レンタカーに乗



萱野三平自滅の間

り込み、まずは、箕面市萱野にある大阪府指定史跡の「涓泉亭」・「萱野三平旧邸長屋門」と、直ぐ近くにある三平の墓所を訪ねました。

三平といえは、江戸城松之廊下の刃傷事件を赤穂に知らせる第一便の使者として早駕籠で昼夜の別なく駆け抜け、途中駕籠が西国街道沿いにある実家の前を通り過ぎる時、偶然葬式に出会い母の死を知りながら任務を優先するため、そのまま駕籠を赤穂へ進め、開城後は、仇討ちの同盟に加わり内匠頭への忠義と、大島家への仕官を願う父重利への忠孝の板ばさみとなり、苦悩の末、元禄十五年一月に自宅長屋門で自刃し、二十七年の生涯を閉じた話は、読者の皆さんも十分ご存知であることを承知の上で、あえて義士の遺薫として書かせていただきました。

墓所で、母小まんの命日が、元禄十四年三月十七日と刻んであるのを確認し、当時の三平の胸中を察すると、改めて文武両道を極めた思慮深く、重い、辛い判断に、尊敬の念を抱いた次第です。

次に今回の主な目的地である、兵庫県へ向うため、車は中国自動車道を通り、加東市(旧滝野町)へ入り、昼食に地元の人気店「大橋ラーメン」を食べました。

昼食後、滝野で神崎与五郎が普請に関わったとされる「与五郎橋」で、予めお願いしていた地元の方から説明を受けました。その方が子どもの頃、地域の長老からよく聞いていた話によると、橋の地点が谷になっていたので、物資の輸送に苦労していたが、与五郎が「聖神池」の築造資材を搬送するため、橋を架けたお陰で人・物の通行が容易になったと説明板も掲げられていたが、いつの間にかなくなっただので、数年前、地元老人会が「与五郎橋」という石柱を立てたということでした。

前述した「聖神池」は、赤穂浅野家の「加東郡代」を務めていた「吉田忠左衛門」が築造されたといわれておりますので、是非確認しようと現地を訪れま



与五郎橋  
(左から3人目は地元の方)

すと、確かに「与五郎橋」から程近い高台に、案内板はないものの、「聖神池」がありました。池を築造したという大袈裟に聞こえるかわかりませんが、谷状になっている下方に堤を築いて、大きな溜池を作ったというほうがイメージしやすいかも分かりません。

さらに吉田忠左衛門により築造された同市内(旧社町)にある、もう一つの池、「状ヶ池」を訪ねました。現在は、市民憩いの場「状ヶ池公園」となっています。説明板には、「築造中に刃傷事件を知らせる書状が忠左衛門に届いたところから、その名が付いたといわれています」と書いてありました。旧社町の中心部に行きますと、幕末まで旗本として続いた家原浅野家の祈願所である「観音寺」があり、境内には内匠頭の石碑を中心に、大石内蔵助ら四十七士の石碑が取り巻く形で祀られた立派な菩提所がありました。

この観音寺は、北播磨における義士顕彰の拠り所



観音寺墓所

(中央が浅野内匠頭の供養墓左右と周囲にある墓が四十七士の供養墓)

となり、毎年十二月十四日には奉賛会により義士祭が行なわれているそうです。

ちなみに観音寺の直ぐ近くの交差点の、信号機には「赤岸」という標識が四方に掲げてあります。

赤岸は、「あこうぎし」がなまったものだろうですが、「状ヶ池」といい、「赤岸」といい、流石に文教の町、旧社町の面目躍如といえますか、日本人が喜びそうな表現の巧さに感心した次第です。

次に、「家原浅野家の陣屋跡」を目指して現地へ向いましたが、広大な敷地に大衆浴場「夢園温泉」が無人で廃屋となり、関係車両数台が放置されたままで、位置的には間違いないと考えられましたが、史蹟・碑など探した結果、確実な手掛かりとなるものは、残念ながら得られませんでした。

思い直して、次の目的地、吉田忠左衛門が在番していた「穂積郡代跡」へ移動し、事前に連絡していた現家主の三浦家の奥様の了解を得て、持参した「穂積郡代跡」図面で広い敷地内を検索した結果、

図面によると当時は、近くに台所があった場所（現在は畑）にある井戸二基を現地で発見、図面と照合させて位置関係を確認し、確かにここが陣屋跡であることを確信しました。

その他、敷地内の祠の位置や陣屋を囲む土塁の一部も図面通り今も残っており、吉田忠左衛門にも会えるのではないかと錯覚が脳裏を横切りました。

興奮覚めやらぬ中、奥様に丁寧に敬礼を申し上げ、次の目的地である「了徳寺」へ向いました。

この寺の山門は、先ほど訪問した赤穂浅野家の陣屋（穂積郡代）の門を移設したもので、つい最近改修工事が行なわれ、風格のある寺院としての佇まいに思わず手を合せた次第であります。

続いて、忠臣蔵サミット会場の「滝野文化会館」へ行きましたが、交流会議で参加自治体の熱が入り過ぎたのか、進行が大幅に遅れていたため、基調講演も短縮され、テーマである「歴史と文化を生かした地域振興」の入り口付近で終わってしまい、やや消化不良のまま午後五時過ぎに散会となりました。講演は、忠臣蔵に関係したテーマであれば興味を持つてたと思います。

一日目最後の予定に、サミット終了後、直ぐ隣の「加古川流域滝野歴史民族資料館」で「小野寺十内の使った鎖帷子」（伝）の特別参観をさせていただきました。

箱書きによると、十内がかつて五峰山光明寺に鎧や鎗を納めたと小野寺家に伝わる「俣祖記」に記されており、昭和四十五年当時、小野寺家には、十内着用の鎖帷子一領、鎗一本、鳶口一本のみが残っていた。しかし、鎖帷子は鉄製のため、腐食が甚だしく、十内の十代目道太氏は、縁者の滝野町曾我の竹内孝二氏を介して鎖帷子保存用木箱（五峰山古代杉）を調整し、光明寺に寄進したとあります。

討入りで、四十七士から死者を出さなかった要因の一つと考えられる「鎖帷子」は、鉄製の細かな鎖



穂積郡代跡

(右下と真ん中僅か左に井戸の跡)

を編み込んだブレザー状のもので、「一向二裏」戦法に加え、これなら吉良側の刀も「赤穂義士」には届かなかつただろうと納得し、負けることが許されない戦いに、改めて大胆細心の戦略と戦術を要したことを学ぶことができました。

七時間足らずで、大きな収穫を得た一日目の旅は、五峰山中腹の展望台から播磨平野の夜景を一望できるおまけが付き、無事終了し、宿泊先の「滝寺荘」へ入りました。

宿の直ぐ南側は加古川が流れ、各部屋の眼下には、「鬮竜灘」と言われ、川の中に奇岩と瀑布がある珍しい風景を望むことができました。

二日目は、朝から全国的な雨模様の中、午前八時過ぎに宿を出発、西脇市の南部経由で多可町中區へ行き、播州糶屋稲荷神社宮司の山本家墓域内で管理している「奥野将監」の墓へ参拝する許可を取り、徒歩で近くの山裾にある将監の墓を目指しましたが、雨が一番激しい時間帯で周辺は暗く、足元はぬ



奥野将監の墓

かみ、前になかなか進めない状況で、墓を見つけないに手間取り、将監が私達に来て欲しくないシグナルを出しているのかなと感じましたが、何とか見つけることができ、丁寧に参りを済ませ下山した次第です。

余談ですが、この地域は酒米の王者「山田錦」の発祥の地であり、手すき和紙「杉原紙」（播磨相原）の産地としても有名です。

次に、同じ多可町の八千代区へ移動し、大石内蔵助が安定した藩財政のため、米の石高を増やそうと普請した溜池など（伝）当時としては大規模工事であった灌漑工事の跡を見学しましたが、現在は西谷公園キャンプ場となり、洪水吐の石垣と底樋管のトンネルのみが残っていました。

続いて、加西市上芥田の山深いところに位置する名刹「久学寺」を訪ねました。

久学寺は、赤穂浅野家初代の長直の時代から浅野家と所縁があるお寺で、事前に連絡していたことも

あり、二十四世の前住職が如何にも修行を長年積まれた柔和なお顔で丁寧に対応して下さり、新築中の本堂脇の庫裏で久学寺と赤穂義士のつながりを詳しく説明していただいた上、義士から先祖供養の依頼など寺宛の書簡も見学させていただきました。なお、このお寺は、先に訪れた西谷公園から一山越えたほぼ真裏にあたり、内蔵助は、灌漑工事の進捗状況を見るため再三訪れ、久学寺を宿所にし、当時の八世住職と囲碁を楽しみ、ここから工事現場まで約二キロの山道を通っていたの言い伝えがあります。

次に、奥野将監が隠棲生活を送ったと言われている、娘の嫁ぎ先である加西市下道山の磯崎八幡宮を目指して移動し、神社付近の隠棲地に立ちました。が、人目を避けたいとはいえ、あまりにも寂しい場所でした。

大石家とは縁戚に繋がりが家老に継ぐ組頭の将監は、一千石を与えられていた幹部で、しかも仇討ち連判に参加していた人物であります。

どんな理由で脱盟したかは、定かではありませんが、享年八十二歳という記録が残っているから、討入り後、二十五年も世間を憚る生活は、本人も娘さんもさぞ辛かったのではないかと推察しました。

なお、隠棲地には「将監は享保十二年（一七二七）に播磨多可郡糺屋村で没した」との案内板があるので、何らかの訳あって、晩年糺屋村に行ったのち生涯を閉じ、播州糺屋稲荷神社の宮司であった山本家の墓所に葬られたものと思われます。

さて、私たちの旅もいよいよ終盤となり、同市内西長町の小野寺一族の墓碑を訪ねました。市道沿いの二十坪程度の土地にある墓碑には、小野寺十内と養子幸右衛門などの一族八名の戒名が刻まれました。

ここは、近くに住む小野寺家に所縁のある古田家が管理と供養をされているそうです。

次に、今回の最後の目的地である同市北条町に向きました。現北条町は、潮田又之丞の姉の嫁ぎ先（渡辺与左衛門）があり、又之丞が赤穂開城後残務処理を誠実に済ませ、母・妻・娘と共に、そこへ身を寄せましたが、岳父の小山源五衛門が、お家再興の望みが断られたのち脱盟すると愛妻を離縁し、源五衛門と義絶しています。

大活躍した討入り後、細川家に預けられ、切腹が決まると、「武士の道とばかりを一すじに おもひ立ぬる死出の旅路に」という辞世を母に託しています。

小高い丘にある墓所で、一人眠る又之丞の実母の墓に、私たちの旅の無事の感謝も込めてお参りをし、旅の締めくくりとしました。

レンタカーの返却先に選んだ姫路駅までは時間に余裕があるので、播磨地方で明治から大正に掛けて神社に「忠臣蔵関連の絵馬」を奉納することが盛んだったことから、可能な限り、神社に立ち寄り見学しようと、福崎町周辺にある「一之宮神社」、「正八幡神社」、小さな神社では、著名な民俗学者柳田国男が幼少の頃よく遊んだという生家近くの「鈴の森神社」などで、大小多くの忠臣蔵関連の絵馬に接し、まさに忠臣蔵漬けの二日間でした。

最後に赤穂浅野家断絶後、義士の親族が多く移り住んだという今なお昔の雰囲気が残る町並み「龜山」地区を車窓見学して、姫路駅で午後五時前、無事旅のお開きとなりました。

今回は、超が付くほどのハードな日程でしたが、改めて、日本人が誇れる精神的文化遺産の大切さに気付くことができた「元禄快挙の遺薫にふれる旅」でした。

紙上をお借りして、お世話になりました関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

## 潮田又之丞の

## 「討入引揚道筋図」

中島康夫



大正十一年十一月十一日、弘前在住の弥富破魔雄氏が発刊された「義士帖」の内、潮田又之丞高教「討入引揚道筋図」という、四十七士の内の一人が示した引揚げ図がある。現在、この図は赤穂大石神社の所有物になっている図史料である。

この図は、討入り後細川家にお預かりになっていた間の元禄十五年十二月二十六日、堀内伝右衛門が潮田又之丞より貰い受けた引揚げの一部を示した図である。

従って、この図は後に大石神社に引き継がれた「津軽大石家文書」の一部ではなく、義士切腹後伝右衛門と無人親子との交際が始まり、その交際の中で伝右衛門より無人に譲られた図面である。

この図を見て、先ずおどろく事は、

(一) 表門東組二十三名の斥候を務めたのが大石三平であった事。図⑬

裏門西組二十四名の斥候は無人が務めた事。図⑭

この大石親子(無人・三平)の行動は、現在の法律や我々の常識を持ってしても完全に共犯であろうと思われるが、三百年前の刑法では、情が絡むと目こぼしも多くなるという事しか思い浮かばない。

(二) 討入られた吉良家家臣が南側長屋の横板に穴を開け、一時逃げ去った事。図⑯  
これは「佐藤條右衛門覚書」にも目撃者の証言として示されているので間違いなく、事実であった事が裏付けされる。

(三) 隣家土屋主税家の表門が西向きで、吉良邸裏門に近かった事。図⑰  
この事も、土屋家人竹中助右衛門が残した「元禄実紀」に示されて

いるが如く、討入る前後に、義士が挨拶に来た事を示す傍証となろう。(四) 「専岳寺へ取籠候道筋人足二十五人」「新大橋へ十六人参候」等の「文言」により引揚げ人数が二手に分かれていた可能性が大である事。図④⑤⑨この事は「寺坂日記」にも示されている通り、新大橋を渡った人数がいたと見て間違いなく、その新大橋を渡った人数の内に「寺坂吉右衛門」がいた事は、寺坂自記に「新大橋にかかり・・・」と記したと見るべきである。

(五) 「茶屋宗好屋鋪 茶屋有 此茶屋にて不残致支度参候由」のメモは、正に、両国橋東詰の小休止を示すものである事。図⑧  
この場所(両国橋東詰)の小休止が「易水連袂録卷之五」に示す「酒屋十兵衛口上書之事」等の伝説を生む事に繋がったと見るべきである。

このように、赤穂義士の事実が、明治二十二年重野安繹が発表されて、様々な憶測や伝説、近年一部の作家等により狂気とも取れる説論等が蔓延している現状であるが、事実というものは、全て証拠主義による暴かれ方がされなくてはならない。

そして、その証拠となるのが、今回示したように、当人たちが筆蹟した一級史料のことをいうのである。

しかし、今回示した「潮田図」にも、これで全てが判明する訳ではなく、むしろ、新しい疑問も生じさせる。

今後、

(一) 引揚げ時、隊列は二手に分かれた他の史料を見つけないければならない。

(二) 「宗好」という茶屋の存在を確認しなければならぬ。

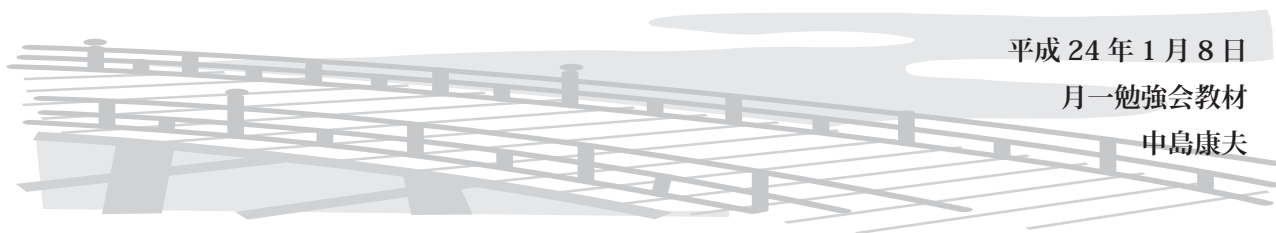
(三) 包装紙に示されている

「吉良上野屋敷絵図面 南禅寺より」の意味が全く解明されていない事。

以上のような事案を追求して行くのが、我々義士研究に携わっている人間の使命である。

三百年前に起きた「元禄赤穂事件」。途中、お芝居に彩られ日本人の心の内側に張り付いてはきたものの、段々に様々な暴論に影響され剥がれ落ちてきている事は実に残念な仕儀である。

## 潮田又之丞高教討入引揚道筋図中説明文



平成24年1月8日

月一勉強会教材

中島康夫

- ① 両国橋（旧両国橋）
- ② 町屋補（うどん屋久兵衛この辺りか？） 御用石場
- ③ 寄手舟三艘にて参。是より揚る 12月14日夜丑の刻
- ④ 新大橋へ16人参候
- ⑤ 専岳寺～取籠候道筋人足25人
- ⑥ 壺つ目（橋）（この橋を渡り永代橋方面へ）
- ⑦ 通り 二番手此道より行く
- ⑧ 茶屋宗好屋補 茶屋有 此茶屋にて不残致支度参候由
- ⑨ 廻向院表門通 三番手6人此道行
- ⑩ 茶屋有 宗好やしき
  
- ㊦ （両国橋東詰 義士集合場所）
- ⑪ 永代橋へ参候霊岸島より舟に乗。上野殿首提参
- ⑫ 道 一番手此道より行
- ⑬ 此所に上野介殿へ出入りの青物屋有之左の股を半弓にて射られ候由
- ⑭ 裏門 無人此所迄案内相図を知る 此内打破押入申候 階子二丁 △二丁有之候
  
- ㊧ 町屋補（前原米店）（相生町二丁目）
- ㊨ 土屋主税表門（西向き）
- ㊩ 本多孫太郎（正頼）表門（東向き）
- ⑮ 御台所町通り（京葉道路）
- ⑯ 此所破屋敷者逃る（南側長屋）
- ⑰ 此所はしご有り 三平此所迄案内 内の様子能知る 相図を定
- ⑱ 此辺に鎗の鞘大分捨有之但鎗も一本捨有之
- ㊪ 旗本屋補（島井久太夫屋敷）
- ㊫ 旗本屋補（牧野長門守屋敷）

包紙表「吉良上野屋敷絵図面 南禅寺より」

朱筆にて 細川様へ御預中元禄15年12月26日

堀内伝右衛門高教より貫受タル由

注：（伝右衛門所有物であり、津軽大石家史料の一部ではない）

東西2尺2寸9分 南北1尺7寸7分

追：（ ）内は筆者の説明、①～⑱㊧等記号も同断。



## NPO法人設立記念

# 第8回忠臣蔵通2級検定試験問題

### [申込方法]

- 検定試験の受験をご希望の方は、住所、氏名、電話番号、FAX番号並びに、第8回2級検定試験申込と記入した用紙を、下記宛てFAXまたは郵送でお送り下さい。FAXをお持ちの方は、できるだけFAXをお願い致します。折り返し受験要項をお送り致します。

宛先 〒135-0047 東京都江東区富岡1-17-1-403

NPO法人 忠臣蔵を守る会

TEL/FAX 03-3630-1927

- 受験要項に従って、検定試験料をお振り込み下さい。振り込みで受験申込となります。
- 受験申込された方に問題の解答票をお送り致しますので、解答票に解答をご記入しお送り下さい。
- 合否は11月になってからお知らせ致します。

### [注意事項]

- 合格点は80点です。24問以上正解で合格となります。
- ご自宅で資料を調べて解答していただいて結構です。
- 試験問題を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- 同じく、会員、受験者同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げるのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題も出題されています。
- 記入問題については、解答用紙以外に別紙を添付していただいても結構です。
- 受験料は締め切りの1ヶ月前までにお納め下さい。
- 最終提出日は、平成24年10月末日です。

平成24年6月

第1問	関ヶ原役の幕開きとなった、伏見城の戦いで思い出される方はどなたでしょうか。
第2問	浅野長政は、秀吉死後、一時期府中の平田家に隠棲していましたが、どんな理由からでしょうか。
第3問	元禄事件発生当時、家老大野九郎兵衛の役職はどれでしょうか。 ①江戸家老 ②城代家老 ③筆頭家老 ④仕置家老
第4問	大石内蔵助の山鹿兵法の師はどなたでしょうか。
第5問	赤穂浅野家が改易になり、赤穂在住藩士が赤穂を離れる際、通行手形はどなたが発行していたのでしょうか。2名のうち1名を書いて下さい。

第6問	赤穂義士の遺品として、おかめの面を預かっている寺院は何という所でしょうか。
第7問	新潟県と関係のある赤穂義士といえば、堀部安兵衛が有名ですが、あと2名おられます。その内1名の方の名を書いて下さい。
第8問	赤穂義士の中で現在まで、その方の血痕が残っている方がおられますがどなたでしょう。確かな方を挙げて下さい。
第9問	中村橋といえば、あなたの脳裏に何が浮かびますか。書いて下さい。
第10問	赤穂義士の中で歯ぎしりをよくする方がおりましたがどなたでしょう。
第11問	甲斐庵といえばどなたを思い出されるでしょうか。
第12問	元禄15年4月、大石内蔵助はお伊勢参りをしておりますが、どなたが同行したでしょうか。
第13問	はぜの木はろうそくの原料となる実がなりますが、どなたを思い出されますか。
第14問	大石内蔵助は元禄15年10月7日、二度と帰らぬ旅に出ますが、その時の同行者の名を見て、あなたは何を思われますか。
第15問	討入りをした時、吉良上野介は病気がちであったと、史料にありますが、討取られた時の上野介の髪型はどれでしたでしょうか。 ①総髪      ②さかやき      ③長髪      ④茶せん髪
第16問	四十七士の中で二番目に酒の好きな方はどなたと思われますか。その方の名を書いて下さい。
第17問	大石頼母良重の妻の墓は、現在どこにありますか。 ①正山寺      ②国正寺      ③泉岳寺      ④青松寺
第18問	熊田葦城著「日本史蹟 赤穂義士」という本の特徴を書いて下さい。
第19問	江戸の商人が「江戸中の手柄」と表現した史料は、現在、どこのなんという方が持っているでしょうか。公共の施設の場合もあります。
第20問	四十七士の中で、自身田畑を所有し、小作人などを使い比較的に裕福であった赤穂義士はどなたでしょう。

第21問	赤穂義士たちは、結局、元禄16年2月4日、各大家家で切腹することになるのですが、切腹の順序で不満の言葉を残して死んでいった方がおります。その方の名を書いて下さい。
第22問	引揚げの途中、転んで実父に叱られた赤穂義士がおりますがどなたでしょうか。
第23問	四十七士は討入りの間近になり、金銭に大変苦労しますが、その事が史料に残っていて、一番お金に困った方はどなたでしょうか。
第24問	明治17年に始まった「加波山事件」に関わった赤穂義士の子孫の方がおります。四十七士のどなたの子孫でしょうか。
第25問	大石内蔵助は、元禄15年12月14日に3名の者に「去年以来志浅深之働之次第」を送りますが、その真筆は一通でも残っているのでしょうか。知っている限りのことを端的に書いて下さい。
第26問	江戸に集まってきた浪士たちは、吉良邸探索に当たり、吉良邸のことを符号で呼び合っていました。何と呼んでいたのでしょうか。
第27問	大石家は禄高が1500石でしたが、どのような形で禄を受けていたのでしょうか。 ①実表米で      ②合力米で      ③知行領地として      ④新田開発地として
第28問	大石内蔵助と理玖は、元禄15年4月の中旬、永遠の別れ、いわゆる俗に「山科の別れ」としてドラマにもなっている離別をしますが、その時、理玖が手を引いて連れて行った子供の名前を書いて下さい。
第29問	次の史料の内、一番初めに脱稿されたのは何番でしょうか。 ①赤穂義人録      ②易水連袂録      ③江赤見聞記      ④忠誠後鑑録
第30問	浅野内匠頭の弟、大学は名目3000石の旗本寄合に列していましたが、実収入はどこから得ていたでしょうか。 ①幕府の旗本領地      ②赤穂5万石の内の御成物 ③幕府よりの実表米      ④赤穂領内の新田

- 問題の解答用紙は、試験を申し込みされた方にお送り致しますので、その用紙を用いて解答をお返し下さい。
- 文章で答える問題はなるべく短く簡潔にお答え下さい。解答にならない分かりきっていることは書かないのがコツです。
- 中央義士会の過去の出版物でも誤記はありますので充分確認の上、解答して下さい。

(財)中央義士会

理事 高城 和夫

東京都西国分寺在住

大石内蔵助と吉田松陰  
忠臣蔵が長州藩に与えた影響を考えてみた  
いと思っています。御指導下さい。

渡辺 寛

史実を知る

楽しさを学ぶ

会員 内山 晴代

東京都板橋区在住

世の中がどんなに変わっても日本人の心は  
変わらない

人として忘れてはいけないうことや心構えを  
学び次の世代に語り継いでいきたい

進藤 務

入会して3年目まだまだ元禄  
事件は知らない事ばかり。毎  
月の勉強会でわかるので楽し  
く学んでいます。

荒川区 金子堅一

先日会社のパワーハラスメントについて、テレビニュー  
スがございましたが、それを、一番書明に行っているの  
がテレビ局ではありませんか。ニュースに採り上げる資  
格があるのでしょうか。胸に手を当てることも直ぐ思い  
当たるでしょう。知っていますよ。

三村次郎左衛門より

昨年の東日本大震災は我々の心にも大きな爪痕を残しま  
した。この時とばかりに出てくるエッセ学者にジャーナリ  
ストという名の偽物が、誤った知識を浸透させ、人々が  
騙されていきます。全く、地元の歴史家がやっていない  
と発表している土木事業をやったことにして、名君にし  
たてあげているどなたかと同じではありませんか。

まあ、何事もほどようせん 惣右衛門

財団法人中央義士会 古書部

文泉堂書店

責任者 小西 重兵衛

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町三十一二二  
電話 〇三(三三二九四)五三四八  
FAX 〇三(三三二九四)五三四九

デーブスペクターさん、あなたの忠臣蔵論はメチャ  
クチャだ。あなたの母国にも、OK牧場の決闘なる  
物語があるでしょう。忠臣蔵の物語も、あれと同じ  
ですよ。これ以上、日本に居られる必要はないから、  
一日も早く、母国へお帰りなさい。あなたのような  
方を出演されるテレビ局にも問題があるけれどね。

昼あんどんより

これからの課題

- 一、講演会や集いなどの積極開催
- 一、正しい歴史認識、事実探求という会の方針の堅持
- 一、赤穂市との連携の強化、相互研鑽

播州赤穂浪人より

NPO法人 忠臣蔵を守る会

理事 富岡 克

東京都中央区在住

忠臣蔵を守る会 会報第三号

会報文責 中島康夫

編集者 荻原 栄

編集依頼先 (財)中央義士会理事会

平成二十四年六月 NPO編集委員会